

## 記念講演

# 声を上げれば世界は変わる

## ー草の根運動とフクシマ

経済学研究者  
福島県立医科大学講師

後藤 宣代 さん



### 私と母親運動

みなさまこんにちは。本日はお招きいただきありがとうございます。昨年度の新座母親大会の報告書を、藤井さん(新座母親大会実行委員)に送っていただき読ませていただきました。

昨年度はアーサー・ビナードさんから、原発と原爆のお話、原爆がニューヨークのマンハッタンで計画され、どのように日本に運ばれて来たか、原爆の歴史を学ばれたのですよね。今年は次のステップへと続けていきたいと思えます。

新座母親大会の報告書を拝見して、私と深い

つながりがあることを発見しました。保育園保護者連絡会は私の母親が関わっておりました。本人に言わせると、自分はしおらしかったというのですが、「ポストの数ほど保育所を」と行動していくうちに、ゴッドマザーに変わってきました。教職員組合は父が関わっておりました。退職後は、年金者組合で活動しておりました。二人とも鬼籍に入っております。

母は早くに亡くなりました。本来なら母親運動は母の領域ですが、母の遺志を引き継ぐと言うとかっこいいんですが、そういうつもりで関

わっております。

「三つ子の魂百まで」といいますが、私は母親運動の歴史を、そんな幼少のころから体験しています。今日、託児所がありましたね。幼い頃は、私は託児所直行組で、母親大会という“おやつが貰える”と、母にだまされて(?)付き合わされていまして、それから数えると母親大会のみなさまとは長いおつきあいです。

私の名前は後藤<sup>ごとうのぶよ</sup>宣代です。本日、医療生協のみなさんいらっしゃいますか？ 医療生協のそもそもの始まりは、戦前の労農党代議士の山本<sup>やまもとせんじ</sup>宣治の墓前で、彼の遺志を受け継ぎ、働く人の健康を守ろうということで創立したのですね。私の名前は、宣代ですが、両親によると、本当は“宣(せん)”という名前にするはずだったのですが、女子が生まれたので、山本宣治さんを支えた賢夫人の千代さんから一字をいただき“宣代”となったそうです。生まれる前から名前負けですね。そんなわけで医療生協のみなさんとも深いかわりがあるわけです。そして、さらに素晴らしいのは、新座母親実行委員会には、個人として参加している方がおられるということです。



### 原発から 60 キロの福島市に暮らす

最初に、私の自己紹介をかねて、フクシマの話を見せてください。このたびの東日本大震災におきましては、私は被災地のひとつ福島県に住んでおります。埼玉県のみなさま、新座市民のみなさま、新座市周辺のみなさまには、多大なご支援やご協力、ボランティア活動でお世話になりました。今日は演壇の高いところから恐縮ですが、現地住民の一人として、心よりお礼を申し上げます。

私が住んでいる福島市は、東京電力福島第一原発から 60 キロです。アメリカ的にマイルで言いますと 38 マイル、アメリカに行って、「福

島原発から 38 マイルのところに住んでいる」と言うと、「信じられない、まだ生きているの」と言われましたが、世界の人々からすると、信じられない所に住んでいるんですね。日々暮らしていると、原発から 60 キロという所は大変微妙な地域です。というのは、原発周辺の住民は避難して、福島市の仮設住宅に住んでいる、かたや福島市在住で「ここは放射線量が高く危ない」と考える住民は、福島市から近県に自主避難に行ってしまった、そういう微妙な地域です。

みなさん、セシウム 137 が風に乗って、どこに降り注いだかご存知ですね。北西の風が放射能を運びました。福島市は原発から北西部に位置し、いわば直撃された形です。私の住んでいるところは、その福島市のなかでも、とても線量が高い所です。すぐ近くには、ホット・スポットということで、避難勧告を受けた地域もあります。そういう地域に住んでいます。

私も主婦をしておりますので買い物に行きます。スーパーに出かけ、「今日はバーゲンだ」といえば、すぐにパツと手を出したいところですが、私が買い物に行くスーパーには食品の放射能が量ってあるんですね。ですから、食品の価格ではなく、スーパーにおいてある放射能測定結果表を見て、もっぱら放射能の「有無」を基準に買い物をしています。

あの 3・11 から、今日で 550 日を迎えました。みなさんも心配しておられると思いますが、特に第一原発第 4 号基、これにはものすごい放射能があるんですが、まだ、その燃料棒を取り出せない状態です。私たちは、台風や余震などで 4 号基になにかあったらどうしようと心配しながら暮らしています。最近、頻繁に余震があります。だから車を持っている人は、ガソリン・メーターが半分になると、すぐに給油に行きます。いざというとき、逃げられるようにね。逃

げられなくなった時は、ヨウ素131の半減期が8日間なので、8日間は家に籠もらなければなりませんから、8日分の食料や水を備蓄しているという状況です。まだまだ原発危機の中にいるのです。収束なんかしていません。



## 沈黙から「フクシマの闘い」へ

昨年度の母親大会でビナードさんから、「原爆と原発が兄弟だ、人殺しの武器として生まれたものだ」ということをしっかり勉強されました。今日は、その原発が、フクシマで水素爆発して550日、「3・11フクシマが問いかけるもの」についてお話ししたいと思います。

私は、この550日を、いわば「検証作業」をするように、過去に遡って1年以上の新聞を読み直しました。すると、いくつかの画期があったことが分かりました。そして、名づけたのが「フクシマの闘い」です。これが、どのように起こってきたのか、この闘いが、世界中の人々とくに若者や女性とつながっていることを話したいと思います。

3.11直後、フクシマでは声は上がりませんでした。国内外の報道は、こんなに大変なのに、静かに行列を作って耐える忍耐強い東北人とか、互いに協力しあって苦難に耐えているとか、美談ばかりでした。3・11直後のフクシマは、津波で亡くなられた方々のご遺体さえ、そのままになってしまいました。原発が爆発したので、避難しなければならなかったからです。報道機関は、本社から原発から離れるという指示がでて、みな離れました。残っていたのは、フリー・ジャーナリストばかりでした。

いままで、原発に何かあった時のことを想定して、避難訓練は行われてきました。それは、「避難訓練がはじまります」というと、玄関からみんなでぞろぞろ出かけていくという、ほんの数時間のものでした。ですから、避難という

と、「あれだな」という感じになってしまったわけですね。それが今回、今生の別れになるとはつゆ知らず、家を離れることになった方々が多数おられます。本当に悲しいことです。

そして津波です。「助けてくれ」、がれきの底から救出をすがる声を聴きながら、避難勧告がでたため、みんな西へ西へと向かって行かざるを得ませんでした。我家は、沿岸部から西に向かう国道を目の当たりにするところにあるのですが、避難してくる車がびっしり渋滞していました。

3・11当初は声が上げられない。行方不明の方もいらっしやる。例えば、原発反対や脱原発、そして福島原発の危険性を長年訴えてきた方々さえも、なかなか声を上げられない。「だから危険だと言ったじゃないか」と言うと、「お前は不幸を喜んでいるのか」と言われたのです。だから、なかなか声が出せない状況が続きました。



## 怒りの声を上げる

そんな中で、最初の声はどうやって上がったのか、それには一人の尊い命が失われることから始まりました。最初の出荷停止は牧草、続いてほうれん草と続きます。そして2011年4月26日、福島県南に位置する須賀川市で、長年有機栽培のキャベツを作っていて、ずっと農民連で活躍してこられた方の、丹精込めた有機栽培のキャベツが出荷停止になります。翌日、「もうだめだ」と自ら命を絶たれました。

そこからです。仲間の死、尊い命が失われたことに、今まで声を上げられないで耐えていた怒り、憤りから声が上がります。「もう黙ってられない。いくぞ、東電本社へ!」、と汚染されたのは人間だけでない、野菜も動物も、そして大地も放射能に汚染されたと、これらも連れて行こうと、トラックの荷台には牛を乗せて行きました。「私も行く、わしも行くぞ」ということ

で、最初は数十名で行く予定が、とうとうバス3台をつらね、150余名が東京の東電本社の前になだれ込みました。

ところが東電は交渉するテーブルにつく人数を制限しました。「何を言うんだ、尊い仲間が殺されたんだぞ」ということで、みんななだれ込んでいきました。そして東電前には愛する夫を亡くした妻が遺影を持って、「父ちゃんは原発を反対して亡くなったんだ、止めてください原発、お願いします」と訴えました。

これは、夜7時のNHKのニュースのトップに報道されました。9時のニュースもトップです。当の農民のみなさんたちは、帰りのインターチェンジでこれを見ます。「これで潮目が変わる。声を上げよう」、そう確信したということでした。

その農民の行動を見て励まされた方たちがいました。若いお母さんたちです。4月になると学校が始まりました。当時、放射能測定器である線量計は、まだほとんどの人は持っていませんでした。ようやくネット販売で線量計を購入して測ってみれば、とても高い。福島市の公式データによると、3月15日夕方の時点で、福島市は28ミリ・シーベルトです。そういうところで除染も何もせず新学期が始まったのでした。

学童をもつ保護者のみなさんは大変心配になりました。文部科学省の基準は、年間20ミリ・シーベルト以下でした。大人も子どもも同じ20ミリ・シーベルトで、しかも測定地点は、地上から1メートルです。小さいお子さんは大人と比べて背が低いから、地面からの放射線量は大人より強く浴びます。福島県は、三世帯同居率が大変高い県で、舅、姑さん、夫婦、そして子どもと一緒に暮らしている家庭が多いです。若いお母さんが心配していると、姑さんが、「国や県が大丈夫というのだから黙っていなさい」と

制止しました。そういう若いお母さんたちも声を上げ始めます。

5月23日、文部科学省に500人以上の保護者たちが駆けつけ、「子どもを大人と同一の放射線年間積算量基準の20ミリ・シーベルトにするな。せめて国際基準と同じ1ミリ・シーベルト以下にせよ」と訴えました。これも、NHK夜7時のニュースのトップで報道され、その後、文科省は、1ミリ・シーベルトに引き下げました。1ミリ以下にするためには、幼稚園の園庭や学校の校庭の線量を下げる必要が出てきました。こうして、ようやく表土はがしや除染が始まりました。こうしてだんだん声を上げていんだという思いが共有されていきました。



### 音楽で情報発信

「プロジェクト FUKUSHIMA!」

音楽家たちも声をあげます。おおともよしひで大友良英さんという小学3年から高校卒業まで福島で過ごしたミュージシャン、2013年度上半期の朝のNHK連続テレビ小説『あまちゃん』の音楽を担当されるそうですが、4月11日、「人間が集団で絶望しているという状態を初めて見て」、「とにかく福島から情報を出さなきゃ」ということで、東京から現地入りします。

彼には同じ福島出身の友人がいます。高校の先輩で、パンクシンガーの遠藤ミチロウです。その方が、「よし音楽フェスティバルをやろう、福島市郊外の広場、四季の里で、日にちは絶対8月15日だ」と、「気持ちは一揆」、日本が敗戦した日にやらなくてはということになります。詳しくは、私も企画から参加した『いま福島で考える—震災・原発問題と社会科学の責任—』（後藤康夫・森岡孝二・八木紀一郎編、桜井書店、2012年）をご覧ください。大友さんが、どのようにこの企画を実行していったかが、詳細に語られています。

こうして、NHKの『ネットワークでつくる放射能汚染地図』という番組で作り有名になった木村真三さんに相談して、なるべく線量の低いところで、線量をみなさんに公表してやろうと、地べたに座るのは心配だろうから、大風呂敷を広げようということで、風呂敷を全国から募って、広場での音楽フェスティバルを企画していきました。大風呂敷に必要な布は、全国からたくさんあつまりました。ものすごい布が集まって、昼は主婦の方、夜は仕事帰りのOLの方が24時間、まるで女工哀史の世界—女性労働者の低賃金・長時間・過密・劣悪労働—のように、代わる代わる24時間の作業で布をつないで、大風呂敷を作りました。

私も8月15日に会場に行ってきました。そこには環境活動家としても有名な音楽家、坂本龍一さんも駆けつけました。全国から1万3千人、殆どが若者で、ぞろぞろと福島市にやってきました。それはインターネットで世界同時中継され、25万人の人がネットを通して見るということになりました。こうして「8・15世界同時多発フェスティバル」は、表現活動、音楽活動となって、展開していきます。

同じ広場、四季の里で、10月30日に「なくせ！原発 安心して住み続けられる福島を！」と題した集会が開催されます。新座からも来てくださったかと思います。「(会場から「ハイ！参加しましたよ」との声が上がり) あっ、ありがとうございます。嶋田さん(新座母親大会実行委員)、来てくださったんですね」。ほんとに多くの方が県内外から1万人集まってくださったんです。マスコミも記者会見室にいっぱいになるほど来たんですよ。だから翌日の新聞はまたトップだと思ったわけです。ところが、大手新聞は全部無視です。その時にフクシマの人たちは思いましたね。「こんなマスコミは相手にしてられない、自分たちで発信するぞ」と決意

を固めるわけです。

2012年3月11日、あれから1年たったあの日、福島県は広いんですね。交通の要衝、郡山市の開成山野球場に1万6千人が集まりました。私も行きましたが、寒くて北風がビューと吹く中を、ブルブル震えながらの集会でした。加藤登紀子さんのコンサートがあり、「100万本のバラ」など歌をうたってくださいました。そしてノーベル文学賞の大江健三郎さんが、あの寒い中を、颯爽と上着を脱いでシャツ1枚になって熱弁をふるってくださいました。集会後は、私たちは郡山市をデモ行進、練り歩きました。「原発いらない！原発なくせ！」と。これが3・11から一周年のフクシマでした。



### 多様な参加者による首相官邸デモ

2012年7月29日、大飯原発再稼働をきっかけに大きく動き始めましたね。ちょうど、2011年の「アラブの春」が、チュニジアから始まったこと、チュニジアを代表する花がジャスミンであったことから、「ジャスミン革命」と呼ばれるようになりしましたね。それに倣って、日本のこの季節の花は紫陽花(アジサイ)ということで、「紫陽花革命」と呼ばれる動きが始まりましたね。そうです、官邸デモですね。首相官邸の周りを市民のみなさんが、一人ひとり多様な方たちが声を上げて取り巻く。参加者は、みなさんはたいへん芸術的で、ドラミングというんですが、太鼓を叩きながら「原発いらない、大飯をとめろ」と声をあげる姿を見て、「私たちフクシマも負けてはいられないぞ」と、福島市でもサウンド・デモが起こります。

この動きを加速したのは、ソーシャル・メディアといわれるツイッターでした。7月29日、福島市でも県庁前に150名ほどが集まってきました。私も、カリフォルニア大学バークレー校のロゴがはいったTシャツと帽子で参加し

ました。その特徴は、個人として自分の声を上げよう、特定の団体の旗やゼッケンなどは掲げないというものです。個人が思い思いの服装や音楽、リズムで自分の脱原発を表現する、それはもしかしたら他の人と違う意見や表現かもしれないけれど、「脱原発」という一点で一致しようということでした。

先頭は、「No Nuke」と飾った軽トラが行きます。若者の多様なファッションには眼を見張りましたが、中高年のオジサマ方も負けていません。田舎で保守的といわれたフクシマも、東京の声に触発されて、変わってきたんですね。

8月15日、今年も大友良英さんたちの、「世界同時多発フェスティバル」がありました。今年は、昨年の大風呂敷を広げた布をチョキチョキ切って、自分の旗を掲げようという企画でした。先ほど、ご紹介した『いま福島で考える』という本は、2012年3月に福島市で開催された経済系4学会の共催シンポジウムの記録ですが、その懇親会で、私も大友さんとお話しましたが、「大友さん、やり始めたら大変ですね、毎年8月は、フェスティバルですね」と申し上げたら、「少なくとも、セシウム137の物理的半減期は30年ですからね、これは、えらいことだなあ」って言うておられました。

東電にしても政府にしても、分断によって声がまとまらないこと、一つの声にならないことほど都合のいいことはありません。かつては労働運動がそうでしたね。運動を分断させて、断ち切らせることで力を削いできました。いま私たちは長い運動に突入しました。人間は疲れちゃうと、本来のてき敵、遠くの敵が見えなくなりますね。つまり、東電とか日本政府とか、世界で原発を進めている人たちの顔は見えないので、つい隣家が避難・疎開してしまうと、「私たちを見捨てて出て行った」、と敵をすり替えてしまいがちになりますね。とても辛いので、その

辛さを、近くにあるものにぶつきたいのですね。



## 世界の運動をつないで

私は、お送りいただいた新座母親大会の資料を全部読んでまいりましたが、大会10周年の記念座談会で、新座母親大会の一番の役割は「運動をつなぐ」こととありました。「これだ!」と思いました。そうだ、今一番必要なことは、分断させない、運動をつないでいくことだと思います。

日本国内でも、なかなかフクシマの現実は伝わっていません。マス・メディアは報道してくれません。フクシマとみなさんをつなぐということがとても重要なんです。日本国内だったいへんなのに、まして世界となるともっと大変ですね。なんとかつなぐ運動を一つでも二つでもやっっていこうと思っています。

私は、「地球市民」、「地球村の村民」、またの名を「渡米貧乏」と称しています。ちょっと小銭が貯まると、すぐに渡米するからです。そして、世界の反核・脱原発・平和活動家や科学者と連帯してくるとというのが私の行動スタイルです。フクシマの声と世界をつなぐことを、本当に微々たる力ですが、やっていきたいと思っています。



## 科学と市民をつなぐ

この1年間は科学や科学者への信頼が地に落ちてしまった1年でした。フクシマでは、科学の信頼が失われていることが大変問題だということで、私も会員である経済理論学会が中心となって、2012年3月にシンポジウムを行いました。その記録集が本になり、先ほどお話しした大友さんの講演も収録されています。

本のタイトルは、『いま福島で考える—震災・原発問題と社会科学の責任—』といいます。住民のみなさん、農民のみなさん、首長さん、ミ

ュージシャン、そして研究者・大学教師たちがともに語り合おう。これからの日本と世界をどうしていったらいいのか、その展望を国際的な規模で語ろうと、日本・福島、チェルノブイリの専門家、そして脱原発に舵を切ったドイツから、脱原発と決めた倫理委員会の委員を務めたミランダ・シュラズさんをお招きして、福島市で行いました。

集会の最後に行われた集会宣言を、世界発信をしようと、日本語と英語で所収されています。この世界発信には、私の願いが強く込められて、実現したものです。英語訳は、私が客員研究員をしていた折のカリフォルニア大学バークレー校の受け入れ先教授、アンドリュー・バーシェイ先生がやってくださいました。万葉集から村上春樹まで、日本語でラクラクお読みになる先生で、私より流暢な日本語を話されるくらいです。

この1年半、550日を見ると、フクシマは、声を上げられなかった一人ひとりが、勇気をもって声を上げるなかで、国を動かし、世界を動かし、社会を変えてきた歩みです。声を上げれば世界は変えられる。理不尽さ、不条理さへの怒り、憤りから、声を上げてきた「フクシマの闘い」です。

手塚治虫さんが新座母親大会の記念講演でお話しなされた時に、こんなことを言っておられました。『第13回新座母親大会報告書』から、引用させていただきます。記念報告のまとめをなされたのは柴田真佐子さん(元新座母親大会実行委員、全労連前副議長で女性部長)です。

「子どもからあとは、みんな未来人なんだ。今いる私たちがいなくなったあと、この日本を支える、社会を支える人たちがどんどん生まれてくる。それは、もとはといえば私たちが育てた育て方をもとに育っていく人たちだ。それが

子孫永劫続く。その最高の責任者は私たちだということをお忘れなでほしい。」

そういう未来のみなさんのために、私たちはこれ以上地球のどこも汚染させてはいけない、命を失わせてはいけない、という思いで私は世界と日本をつなごうと決意しています。



## 2011年、世界に広がる憤りの声

世界を見てみると、2011年は憤りの声が上がっていたのでした。どんなにか私たちを勇気づけてくれる憤りの声でしょうか。今日は、新座のみなさんにご紹介したい一念で、フクシマから駆けつけてまいりました。

2010年12月、アフリカのチュニジアで、果物売りの若者が自ら命を絶ちました。やっとお金を貯めて、果物かごを買い、露天商となりました。これで母親や幼い兄弟たちを食べさせていけると思ったのですが、ワイロを求める役人がその果物かごを取り上げました。若者は再三再四、役所に通い、返してくれるよう訴えましたが返してくれません。とうとう憤ったその青年は、自ら油をかぶり、命を絶ちました。それがインターネットに流れ、それを見たアフリカの若者たちが憤ります。こうして2011年、チュニジアで始まった革命は、独裁政権を倒し民主化へと舵を切りました。

そして、この運動はエジプトの首都カイロに伝わります。カイロにはタハリール広場という大きな公共空間があります。憤った若者たちが広場に集まり、テントを張って居続けます。音楽を鳴らしたり、詩を朗読したり、居続けるためには食べることや家も必要ですし、自分たちが何をやっているか、伝えるメディアも必要だということで、みんな自発的に仕事を分担し、いわゆる分業ですね、そこで生活を維持していたのです。

タハリール広場での体験は、世界中の若者を勇気づけます。5月になると、アメリカ発の金融危機で財政危機に陥ったスペインでも大きな運動が起こります。マドリードのプエルタ・デル・ソル広場に若者たちが集まってきます。スペインの若者の2人に1人は、失業中です。彼らの訴えはこうです。「われわれは企業や銀行で扱う商品ではない」。彼らは学費の値上げや住宅費も値上がり、住む所もないんです。そこで、「われわれには家もない、仕事もない、年金もない、ただ我々には恐れもない」と名乗ります。

彼らは広場に居続けて自分たちを主張します。「広場は誰のものだ、われわれのものじゃないか、ここを取り戻すんだ、未来を取り戻せ」、形骸化してしまった民主主義に対して、「真の民主主義を今こそ」、これが彼らたちのスローガン・合言葉でした。



### オキュパイ・ウォールストリート

その声は7月になると、大西洋を越えて北米へ移っていきます。7月、ある雑誌がブログ上で呼びかけます。どういう雑誌かというと、アメリカでは、なんでも買って買ってと商業主義を煽る広告でいっぱい、そういう商業主義に汚染された、なんでも買え買えと地球をゴミの山にするような活動に反対しようという雑誌『アドバスターズ』です。

「タハリールの体験をつくりだす用意は出来ているかい。9月17日にマンハッタン南になだれこもう。テント野営しよう、食事をつくろう、平和的にバリケードをつくろう。そしてウォール・ストリートを占拠しよう。」

こうして「オキュパイ・ウォールストリート（ウォール街を占拠せよ）」へと展開していきます。ニューヨークはマンハッタン島の最南端近

く、ウォール街の近くの小さい広場、ズコッテイ公園といいます。同時多発テロの標的となったツイン・タワーのすぐ隣で、彫刻家のイサム・ノグチの彫刻作品「レッド・キュービク」があります。テニスコート10面くらいの小さな空間です。ここに、9月17日、テントを持った若者が2000人以上集まってきて、そこで2か月半も生活を始めます。

トイレもいるし台所もいる、それを全部自分たちで自発的にやったんです。当初、ニューヨーク市警も馬鹿にしていました。ところがこの運動は、全米に広がっていったんですね。ニューヨーク市では公共空間でのマイクは禁止されていたので、参加者が意見を言おうとすると「マイク・チェック、マイク・チェック」と言う。その声を、次の一団は、繰り返す。そして次の一団も繰り返す。まるで、二重唱三重唱になるようにして、口から口へと、まるで人間マイクのように伝わっていくんですね。こうして一人ひとりの発言が伝えられていったのです。

この占拠の意思決定の方法は、母親運動と同じなんです。全員参加・全員が合意しないと決定しない。全員が合意したことをやりましょうと繰り返し議論を重ねる。こういう総会方式を英語で「ゼネラル・アSEMBリー」と言います。新座母親大会にお集まりのみなさんは、「なんだ、そんなことか、うちはいつもやっている」とお思いかもしれませんね。

どうやって占拠を維持していくか、これが、「ワーキング・グループ」といわれるものです。なにしろ維持していくということは、そこで生活するということですね。そこで、食糧、医療、衛生、図書、法律、メディア・広報、アート班などに分かれ、参加者の自発性に基づいて編成していったのでした。例えばアート班、若い芸術家は作曲し、絵を描いて販売した。

ニューヨークは高い建物を建設した人は、か

わりに例えば公園とか、公共スペースを作らなければならないことになっているんです。2000人も集まってきた公園というのは、実は私的な土地だったのです。ニューヨーク市警は、全米に広がった占拠運動を、いよいよ取り締まろうとします。とくに脅威だったのは、オキュパイ・ウォールストリートの合言葉・スローガンです。



### 「我々が99%」

アメリカはものすごい格差社会でしょう。たった1パーセントの人が、アメリカの富の90%を持っている。なんでたった1%の人が国の政治を動かしているのか。そこでスローガンは、「我々が99%」、英語で言えば「We are the 99%」になったのでした。それが世界中に一気に広がっていったのですね。この運動を称して、新聞などでは「格差是正デモ」と報道されました。でも、私は実際に参加してみて思ったのは、「デモじゃないよ、占拠だよ。反格差だけが強調されるけど違うよ。居座り続けて、そこから新しい生活を創り出す、未来をここで先取りする、新しい生活様式創出運動、しかも都市の真ん中で広がった都市革命だよ」ということです。

私はこの1年間、7回アメリカに通っています。いろいろヒヤリングをし、いろいろな資料を読み、実際に参加してきました。そして確信したことは、なぜ99%の人々の民主主義とならないで、99%の声が届かないで1%の声だけが国を動かしているのか。「私たちが99%なのだ」、「私たちこそが99%なんだ」、そういう切実な思いを感じ取りました。スペインの若者たちが「真の民主主義を今こそ」というスローガンは、象徴的です。



### フクシマも、世界も、99%の声を

こうして2010年12月、チュニジアの一人の青年の憤りの死から始まった若者たちの「真

の民主主義を今こそ」、「我々が99%だ」という動きは、世界中へと伝播していきました。

先ほどから「オキュパイ・ウォールストリート」とお話ししてきましたが、ウォール街は他でもありません。世界のマネー・ゲームの本拠地で、1%の人たちが世界を牛耳っている象徴です。そのおひざ元から、社会を変えていこうという運動が起こったのです。今日みなさんにお伝えしたくて用意した資料をみてください。ニューヨークで発行されている『タイム』という雑誌です。

『タイム』誌は、毎年12月になると、恒例の「今年の人」といって、今年一番目立った人、有名な人を表紙に飾りますが、昨年の表紙を飾ったのは「抗議する人」です。特定の個人ではありません。地球上のそこかしこで抗議の声を上げる人、それが「2011年の今年の人」なのです。

資料の右端を見てください。みなさんも参加なさったであろう、昨年9月19日の明治公園の6万人のデモが掲載されています。一番先頭にいるのは大江健三郎さんたち呼びかけ人ですね。この行動が、昨年1年の憤りの地図の中に、日本の憤りとして位置づけられているのです。2011年は、世界中で、憤りの声を上げた「抗議する人」の年でした。あのチュニジア、そして農民の憤りから始まったフクシマ、それが一つに見事にマッピング（地図化）されているんです。

このような運動を歴史上に位置づけると、それは1848年に比するものです。1848年は、労働者が声を上げはじめた年、市民革命です。当時は、ヨーロッパだけでしたが、今回は地球規模、グローバルに展開しています。いわば「グローバル市民革命」の年、それが2011年です。



## 飯館村は今 除染とゼネコン

フクシマは、今どうなっているのかお話しさせていただきます。私は飯館村に入っています。飯館村は、本当に悲劇の村です。平成の大合併にも負けず、大地と共に酪農と農業で暮らし、自立した村をめざすぞと取り組んでいた、誇り高い村です。そこに放射能が降りかかったのです。3.11から1か月は、原発周辺から逃げてきた人々を受け入れて、被災者を支援していた村でした。それが1か月後、高線量ということで、国によって強制避難地域になりました。

現在、飯館村において、激しい「つばぜり合い」、「フクシマの闘い」が展開しています。2012年7月、国は飯館村を3つに分けました。年間の放射線量が20ミリシーベルト以下、それから20ミリから50ミリまでのところ、そして50ミリ以上のところ。一番線量の低い20ミリシーベルト以下のところを、2015年までに帰村地域と決めました。除染をしなければ線量が高いので帰れません。ここに国は除染モデル事業と称して、国の復興予算を注ぎ込んでいます。巨額のカネが、国から、特に環境省と農水省を通して、大手ゼネコンに注がれています。

いま県内の除染事業は3つの地域・ゼネコンに分かれています。一つの地域は大成建設、もう一つは鹿島建設、いま一つは大林組がそれぞれ担当しています。これらのゼネコンは、これまで原子炉の建屋を建設してきました。現在、日本には57基の原発がありますが、そのうちの10基を作ったのが大成建設、24基が鹿島建設、11基が大林組です。この建屋建設の「ビッグ・スリー」は、このたびの除染事業でも「ビッグ・スリー」となっています。

いま福島は除染バブルです。誰が実際に除染作業しているかということ、日雇い労働者です。

求人広告には、例えば「除染作業員募集中、1日9000円から1万5000円」とあります。除染は自宅の中心地点から半径20メートルです。飯館村は8割が森林、とくに里山です。風が吹けば宅地に放射能が雨風とともに落ちてくるんです。だから自宅から半径20メートルを除染しても、次から次へと放射能が降りてくるわけです。



「<sup>ちから</sup>かーちゃんの力」は素晴らしい、

ジェンダー・エンパワーメント

そういう地域で頑張っている方々がいるんです。飯館村は先ごろ村長選挙が行われて、3・11時の村長、菅野典雄さんが5選しました。菅野さんが、初当選した時に何をやったかということ、「若妻の翼事業」といって、ジェンダー・エンパワーメントということで、若い妻さんたちに海外視察の機会を作ったのです。とくに環境先進地のドイツなどに派遣したのです。

当時、中高年の男性たちは、「若いかーちゃんを海外に行かせるなんて、税金の無駄遣いだ、もったいない」と言ったそうですが、村長は怯まず、「いや人づくりだ、ジェンダー・エンパワーメントだ、女性の自立を支援する」と派遣を続けます。海外視察を終えて帰ってきた「かーちゃん」たちは、学習の成果を地域づくりで発揮するわけです。そういう方たちが男女平等をめざす男女共同参画でも頑張るわけです。

今から10年前の2001年、「福島県男女共生センター」が設立され、私は、センターの専門研究員として、約1年間にわたり、県内を調査しました。「平成の大合併」前で、県内には90市町村があり、一人で回るのは大変でした。当時、福島県は女性の政治参画が全国最下位、つまり47都道府県中47位だったんです。それで、なぜそんなに遅れてしまったのか調査し、改善にむけて提言せよということになり、その仕事

に従事していました。

ところが、福島県内にも先進的な地域があるということで、入っていった地域が飯舘村だったんです。そこで飯舘村の素敵な女性たちと出会ってお話ししてきたら、みんなエンパワーメントするために海外視察してきた方々で、村でいろいろ事業を起こしている方たちだったんです。やっぱり女性に教育や研修の機会を設けると、3・11のような大変なときにも踏ん張れるのですね。

飯舘村では、「かーちゃんのカ・プロジェクト」という組織が発足しました。これは、福島大学の小規模自治体研究所が支援し、NPOと協力した事業です。村から避難しているお母さんたちが、安心安全で、ヘルシーで美味しいお弁当を作って、それを被災者の方に届ける。それだけではないのです。被災者が仮設住宅にとどまっていると、みなさん運動不足になります。かつては生業の農業や畜産に身体を動かしてきた方々が、狭い仮設で生活するのです。手足も縮まるということで、みんなとコミュニケーションするという意義もこめて、スポーツ・ジムを始めたのです。ヘルシーなお弁当をつくって、若い方をインストラクターとして招いて、健康増進づくりをしているんです。

そして地域コミュニティー・バスという、あちこちの仮設住宅に点在する住民たちをつなぐバスも運行しています。また飯舘村にはなかなか戻れませんが、村にあった伝統文化芸術を地域を離れても伝承していこうと、お正月の飾りやお餅づくりもしています。私も購入しましたが、美味しいお餅です。そういうことが大手ゼネコンに対抗する、草の根からの地域コミュニティ再生、復興の大きな力となっています。

それだけではありません。今日の会場には、中高年の男性のみなさんも多数おられますが、中高年の男性のみなさんも支援に入っています。

現役時代は科学者・技術者だった方たちが中心になって飯舘村に入り、工夫を重ねて、なんとかお金をかけずに、継続的に除染ができないかと実験しています。

まるで火事場泥棒のように、災害に便乗して、暴利をむさぼるやり方を、「惨事あるいは災害便乗型資本主義」(ナオミ・クライン)といいます。そういう上からの「惨事・災害便乗型」に対抗する形で、下からの「草の根型」によるコミュニティ再生運動が起こっています。言ってみれば、ジェンダー・エンパワーメントと科学者、地域の人たちとが協働して、地域を再生させようとしているのです。

今夏は、「電力が足りない、足りない」再稼働を煽るキャンペーンが行われました。でも。今夏、私たちは酷暑を、原発なしに乗り切りました。日本はみんなコロッと騙されやすいですね。そこは、一つ一つ科学の力で、事実の積み重ねで、剥ぎ取っていくことが大事だと思います。



### 世界をつなぎ、感動を呼ぶフクシマの詩

最後に、みなさんに詩をプレゼントしたいと思います。これについてご説明させていただきますと、2011年、いろんなところでみなさんにお世話になりました。そして多くの母親運動にかかわる方たちとの出会いがありました。

2011年6月、兵庫県西宮市の母親大会でお話させていただきました。西宮はあの阪神大震災で、多くの方がお亡くなりになった地域です。10月、同じ兵庫県の宝塚市母親大会でもお話しさせていただきました。そこに西宮のお母さんたちが会いに来てくださって、その時、私に一つの詩を教えてくださいました。「後藤さん、この詩をご存知ですか」、「いえ、知らないです」と答えると、「えっ！ 福島の農民が作った詩ですよ」と言われ、教えて頂きました。その詩を読んで私は感動しました。

私は2011年、「フクシマの闘い」を表現する適切な芸術表現はないかと求めていました。テレビで流れるのは、「負けないぞ、福島」、「We love 福島」、そういうものが多かったのです。それも大事かもしれませんが、でも、それだと「フクシマの闘い」の、敵が見えない、加害者が見えないのです。だからそういう闘いが見える詩を求めていました。西宮の母親連絡会のみなさんが教えてくださった詩に、私は「これだ!」と思いました。今日、これからご紹介するのが、この詩です。

10月当時、私は翌日からアメリカはカリフォルニア大学バークレー校で開催されるフクシマ・シンポジウムで報告することになっていました。バークレーでの英語報告の最後に、この詩のみを日本語で朗読しました。すると日本語がわかる方々の間が、「感動しました、ぜひ英語にしてください」といつてくださいました。こうして、詩は、私のバークレー校の受入れ教授で、『いま福島で考える』でも集会宣言を英語にくださった、近代日本研究の第一人者、アンドリュー・バーシェイ先生によって、英語になりました。

そればかりではありません。英語になった詩に感動したアメリカの芸術家が、版画にしてくださいました。現在、農民連の本部で取り扱っている版画ポスターは、日本語の詩と英語の詩と、そして芸術家がつくった版画が一つになったポスターです。この詩は、いま世界中の脱原発集会で朗読されていると知り、本当に嬉しく思います。

私は、関西とフクシマとの間、そしてこの日本とアメリカとの太平洋との間に、小さな、小さな、架け橋をつくることになりましたが、元はと言えば母親運動のネットワークが築いてくださったものです。ですからこの詩は母親運動に携わっていらっしやるみなさんと、私と、そ

して世界中のみなさんとの、共有財産、いわば運動をつなぐ架け橋の詩です。ですから、今日、ご披露させていただきます。「運動をつなぐ新座母親大会」にこそ、ふさわしいと思っています。

### 一詩の朗読—

前田新「見えない恐怖の中でぼくらは見た」

(次頁掲載)

(まとめ・文責／竹森絹子)

(2013年4月28日 後藤宣代さんによる校正)

#### 後藤 宣代 (ごとう のぶよ)

経済学研究者・福島県立医科大学講師。岐阜県中津川市出身。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。カリフォルニア大学バークレー校客員研究員を歴任。帰国後もアメリカの女性・社会運動(NPO、NGO、社会起業家)の調査活動を続けている。地球市民の活動を支援するNPO「コモンズ」の理事や、「働きつつ学ぶ権利」を支援する基礎経済科学研究所の理事を務めている。

東電福島原発から60キロの福島市在住。放射能と闘う「フクシマの声」を世界へ発信、2012年11月にはアメリカ文化人類学会やカリフォルニア大学バークレー校でフクシマの闘いを報告する。「我々は99%」の合言葉で知られるオキュパイ・ウォールストリート運動など、世界各地で沸き起こっている「いきどおりの声」とフクシマをつなぐアクティビスト。2011年埼玉母親大会で記念講演を行う。

